Fancy Fragments oF "Fantasy" Fitted For Feasible Facts Polylogue@JK Fugitive Fromm Freud Four Freedoms

札幌市医師会
華岡青洲記念病院
華岡（はなおか）　慶一（けいいち）

私は、札幌の２月が好きではない。正確には、苦手というべきか。

振り返っても、すぐに思い浮かぶ記憶はあまり楽しいそれではない。

それにしても、今年の２月は、ひどい。記憶の及ぶ中で、雪という点では最悪の年だ。

……確か、あの高校３年の冬もそうだった……。

私は、大学受験に向けた最終学年になっていた。英語を通したKM先生との緊張しながらも充実した時間もなくなり、ちょっとしたスランプ（抑うつ状態）に陥っていた。KM先生の進路に対する言葉が耳に残っていた。もしや、KM先生は、私のなかに母への「エディプス・コンプレックス」の存在を感じていたのか（フロイトに分析を依頼したら「典型的」と即答しただろう）。だからこそ、彼女はあのような警告を発したのではないか――それは、僕自身への問題指摘だった。

……かつてあの日、いわば思索のポーズボタンを押したような高校生活だったが、心は、次第に自分を取り巻く現実から遠ざかっていくような気分で塞ぎ込んだ。秋の夜空を見上げながら「くだらねえ～、とつぶやいて～」と口ずさみながら……次のステージへ行かなければ……でも一体どこへ？　その時はまだ知らなかった（気づいてなかった）。今宵の月とは別の月が存在することを……。

当時、高校の授業は、ほとんど＊＊ゲーだった――後に知ったことだが、１年後輩に伝説のゲームクリエーター（ないものは自分で作る天才！）がいたそうだが、残念ながら、京都で早世してお目にかかる機会はなかった。

心は、雪の季節になるといっそう塞ぎ、感情は冷え切った。スキゾフレニア的に浮かぶ冬の出来事の数々。「柔道乱取り骨折事件」「雪戦会乱闘未遂事件」「幻の究極シュート事件」「セント・ヴァレンタインデーの喜劇」「ある阿呆生徒と教師の一瞬」といったそれ自体は、輪郭を持った出来事。各々の輪郭は明瞭なのだが、全体（画）像の構成が思い浮かばない。それは、色彩を持たない白の世界。言い換えれば、出来事の断片は明瞭に思い浮かぶのだが、当時の感情と行動の関連性（彩り）がまるで記憶に見当たらない。要するに「只々つまらなかった」ことなのだろうか。

さして、何か目的があったわけではない。その時は、自分の問いに対して、答えてくれなかった、故郷・北海道・札幌（親元）から離れたいと漠然と感じるようになった。

――同様に、屈折した高校生活を送った先輩「西部邁」の言うところの――棄民の地（パラノイア）・開拓の地（スキゾ・ノマド）――フロンティアスピリットに満ちた希望の地――の表象記号（故郷・フルサト）の言語的構造（同一性・差異性・相互斥力可塑性・共時性）のシニフィエ（意味）は？　あの東京（パラノ？）――漱石の『こころ』の「先生」がいた所、芥川が、永井が、谷崎が、紅葉が生まれ鏡花や太宰が目指した所――とは違うのか。フィールド（集団・階級）の差異で所属するエージェント（心）の行動表象特性・「ハビトゥス」は変わるのか（ブルデュー）？　あるいは、地域を問わない、資本主義社会に蔓延したマックス・ウェーバーの「鉄の檻」中で自ら進んで囚われた者のメタファーなのか？　畢竟、強い渇望として、今までとは違う環境で自分を感じてみたいと思った（逃走）。自分の脳というフック（釘）に引っ掛かっている何かが呼んで（叫んで）いた。そして、「アンチオイディプス」という逆逃走（Fromm）の旅に出た（プレイバックボタンを押した）。例えるなら、この時、私はこの宇宙との関わり方として、Astronomer（天文学者）ではなく、Astrologist（占星術者）でもなく、Astronaut（宇宙飛行士）の道を選んだ。

人生において、気がつかないところで、慢性的な自滅的活動（精神的にも身体的にも）をしていることがある。もし、自分が現在取り込まれている（選び取った）状況によって、理性（習慣的感性）が――ヒュームの言うように知覚の束として――形成されるならその束を形成する一つ一つの要素を吟味できる環境に身を置くべきであろう。しかし、その当時の選択肢は限られていた（超越論的解決も含めて）。厄介なことに、そんな時期に、私に言語ゲームとしての「言語論的転回」（Linguistic Turn）が訪れたのだ。私は、ラカンの言う「欠如」を埋めようと、もがいていた。その時、私は、正に「祝祭」を必要としていた。

――その後の出来事はいつかその外套を羽織る時に書いてみたいが、どうやらそれは、今ではないようだ。……漠然と江戸が好きだった（東京ではない）。兎に角そこで、ジュリア・クリステヴァ（JK）、バタイユ的に、「差異と反復」を意識し、「秩序と混沌の弁証法」を実践に移した。さらに、差異が正か負かで前後の大小関係を決定し、それを細かく反復することで、生成過程を微分的に分析した（ドゥルーズ・ガタリ）。その結果、その新たな弁証法（ヘーゲルの進歩史観とは異なる）の経験以来、私は象徴秩序の現状のみに囚われる感覚を臆病と見なし、それを取り繕う論理を卑怯と断じる（認知的斉合性理論の家畜）ようになった。改めて、ソシュール的に構造的言語概念を援用して言えば、それぞれが対応する、差異的（棄てられた者たち・フロンティア精神）・恣意的（高度経済成長期の差異関係の気ままな配置）・共時的（家族も含めた関係性の時代的横断面）の意味（象徴秩序構造）を知るには、その記号的括りの外に出て、カオス・セミオティック――エロスとタナトスのせめぎあい――の中へ入らなければ判らないと思った。次回、母親から "Baby you can Drive My Car. And maybe I'll Love You." と言われてきたとの妄想「エディプス・コンプレックス」からの逃走報告（プレイバック）をして、エピローグとしたい。